

## 自己点検・評価 様式(平成26年度実施)

大学名 神戸学院大学  
研究科・専攻名 薬学研究科  
入学定員 3 名

### ○ 入学者数、在籍学生数

※入学のコースを別に設けている大学は、コース別に記載すること。  
※「旧4年制薬学部出身」は、平成17年度以前に薬学部に入学者を指す。

#### ・入学者数

平成24年度：2 名

内訳：6年制薬学部出身 1 名（内社会人  名、留学生  名）  
4年制薬学部出身    名（内社会人  名、留学生  名）  
旧4年制薬学部出身 1 名（内社会人1名、留学生  名）  
薬学部以外出身    名（内社会人  名、留学生   名）  
その他    名

平成25年度：2 名

内訳：6年制薬学部出身 1 名（内社会人  名、留学生  名）  
4年制薬学部出身    名（内社会人  名、留学生  名）  
旧4年制薬学部出身    名（内社会人  名、留学生  名）  
薬学部以外出身 1 名（内社会人1名、留学生   名）  
その他    名

平成26年度：4 名

内訳：6年制薬学部出身 3 名（内社会人  名、留学生  名）  
4年制薬学部出身    名（内社会人  名、留学生  名）  
旧4年制薬学部出身 1 名（内社会人1名、留学生  名）  
薬学部以外出身    名（内社会人  名、留学生   名）  
その他    名

・在籍学生数（平成26年5月1日現在） 8 名

## ○ 「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と実際に行われている教育との整合性

本研究科の「理念とミッション」は、薬学系人材養成の在り方に関する検討会から提言されている4年制博士課程の主たる目的と社会に対する使命として相応しいものと考えている。

4年制の薬学部では、「薬学に関する高度の専門知識や技能を持った人間性あふれる人材を養成することを教育方針としている。そのため、(1) 薬剤師として必要な基礎薬学・社会薬学・医療薬学の知識および技能と、各自が社会で働く職域に必要な知識および技能を身につけていること、(2) 進歩する医療について、常に自ら学び、問題点を発見し、解決するための能力を備えていること、(3) 医療現場あるいは関連業務の現場で、患者あるいは顧客尊重の立場で医療貢献あるいは社会貢献することができることを学位(薬学士)授与の方針としている。

さらに、大学院薬学研究科では、6年制薬学部の教育・研究の柱として、より高度で先駆的な薬学教育・研究を行っている。薬学研究科では、国内外の臨床薬学分野において第一線で活躍できる高度の専門性と研究者としての高い能力を持った臨床薬剤師、医薬品開発研究者および教育者などの養成を目指している。そのため、(1) 医療人として優れた疾病治療に貢献することに強い意欲を持った者、(2) 薬学の高度の専門性と研究能力を身につけ、将来、高度専門職業人として活躍することを希望する者、(3) 他者と連携を保ち、共同し、問題解決に努力し、リーダーとなりうる者、の学生を受け入れて教育を行っている。

- ・ 開設年度の自己点検・評価に記載した「理念とミッション」、「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」と、実際に行われている教育との整合性について、4年制薬学部を基礎とした博士課程の教育課程との違いを明確にしつつ、自己点検・評価を行うこと。

## ○ 入学者選抜の方法

本研究科の受験資格は、6年制薬学部を卒業した者(卒業見込み者も含む)および旧薬学教育課程(4年制薬学部)の修士課程を修了した者で薬剤師免許有している者を除き、以下のとおりである。

- (1) 6年制課程(医学部、歯学部、獣医学の学部)を卒業した者
- (2) 外国において学校教育における18年の課程(最終の課程は、医学、歯学、薬学または獣医学)を修了した者
- (3) 修士課程を修了した者(薬科学)
- (4) 薬学以外の修士課程を修了した者
- (5) その他(学力認定)

とくに、(4)については、おもに国内外の医薬品開発における基礎から臨床応用までの先進的研究動向を正しく理解し、それを研究実践の中に取り入れることによって先進的な研究方法論を修得し、それを基礎として優れた医薬品の臨床開発や評価に役立てることができる人材の養成を目指している。また、(5)のその他の学力認定について

は、審査基準として薬学研究科委員会で個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学時において学部卒業後3年以上を経過している者としている。その審査方法は、入学資格審査申請書の記載内容に基づき、最終学歴後の経歴、職歴研究歴、取得している資格、社会的活動などの書類審査、必要に応じて面接審査を行っている。

入学者選抜方法については、一般入学試験、社会人対象試験、外国人留学生試験のいずれも下記を課し、総合的に判断して選考している。

(1) 筆記試験（英語）

辞書の持ち込みを認める（電子辞書、専門用語辞典などは認めない）。

(2) 口頭試問

卒業論文、修士論文などを中心に行う。

上記のように、いずれの受験資格者に対しても(1)の筆記試験では、受験生個別の入学者選抜方法を行っておらず、共通の試験問題を課している。しかしながら、(2)の口頭試問では、それぞれの受験生に配慮した内容の口頭試問を行っている。

以上のような入学者選抜の方法については、研究科委員会にて継続的に審議されているが、開設時からの変更はない。

## カリキュラムの内容

カリキュラムの内容については、「資料1」に、進路別履修モデルは「資料2」に示す。

(1) 教育方法

本研究科が受け入れ、養成する人材には、より高度の専門性と研究能力を身につけることに強い意欲を持った社会人（薬剤師）が含まれる。そのため、このような社会人学生に対して一般学生と同等の教育機会を提供することは研究科にとって重要であり、この点に工夫した教育方法を行っている。

研究科の授業科目は、講義科目、薬学演習、ならびに薬学研究からなる。時間割は「資料3」に示す。

講義科目は医療薬学分野において重要と考えられる8科目で構成し、学生はこれらのうちから少なくとも6科目以上の修得が求められる。また、講義は、前期・後期を問わず水曜日の午後4時45分～6時15分、6時30分～8時、土曜日の午後3時～4時30分を講義時間として、社会人学生の受講が可能な時間帯に設定している。

薬学演習は、自立した臨床薬学の研究者へと成長するために必要な基礎素養を高めることを目的としている。そのため、1) 研究科が定期的で開催する研究発表会において、研究計画・研究進捗状況の発表を行う。研究発表会は1年次生では前期1回と後期1回、2年次性以降は年1回を予定している。2) 指導教員のもとに、研究室での研究論文の抄読、研究会や学会などへの発表準備、学術論文の作成指導を受ける。

薬学研究では、学生が与えられた研究課題に主体的に取り込むことに重点を置いている。学生指導教員は、学生の研究計画や研究実践に対して直接の指導を行うが、ほかの研究科専任教員についても上記の薬学演習を通して、直接的または間接的にアドバイスを提供する。在籍する学生は少人数であることから、指導教員のみならず研究科全体で学生指導にあたることを基本にしている。

臨床薬学研究では、学生は神戸市立医療センター・中央市民病院において、1年次生の6ヶ月間、医療ならびに薬剤実務などに関する研修を受ける。この研修の履修者については、学生の選択希望と指導教員の承認のもとに研究科が決定する。ただし、病院薬剤師を現職とする社会人学生については、勤務する病院での業務状況などの内容から、本科目と同等以上の内容を持つと研究科が判断した場合には、単位として認定することができる。

## (2) 履修科目・履修指導・研究指導など

### 1) 授業科目

授業科目は講義1単位、薬学演習2単位、薬学研究4単位、臨床薬学研修2単位からなる。

### 2) 履修方法

合計30単位以上の修得が修了単位である。

- ① 講義科目から6科目以上を修得する。
- ② 薬学演習Ⅰ～Ⅳをすべて修得する。
- ③ 薬学研究Ⅰ～Ⅳをすべて修得する。
- ④ 臨床薬学研修は自由科目とする。

### 3) 授業形式

講義は単独の教員、または複数の担当教員によるオムニバス方式とする。

### 4) 履修指導「資料4」

社会人学生についても、一般学生と同じように夜間や土曜日に履修することが可能であり、また、薬学研究についても指導教員のもとに、勤務先の病院などの承認を得ながら、研究準備と研究調査が可能である。履修指導は、以下のように行う。

- ① 大学のホームページから研究科教員の研究分野を閲覧することができる。そのため、受験前に大学院担当事務窓口連絡し、研究科教授の中から希望する指導教員を選ぶことが可能であり、その研究内容の説明を受けたあとに指導教員を決定する。
- ② 履修指導は指導教員ならびに研究科の教務担当委員の教員が行う。

### 5) 研究指導「資料4」

薬学研究における指導教員は、学生の入学が確定したあとに研究科委員会が決定する。副指導教員1名は薬学研究科専任教員、食品薬品総合科学研究科専任教員の中から、指導教員の推薦と候補者の内諾のもとで研究科委員会が決定する。

国内外の臨床薬学分野において活躍できる、高度の専門性と研究者としての高い能力を持った臨床薬剤師、医薬品開発研究者ならびに教育者などの養成を目的とし、組み立てられた上記のカリキュラムの内容は、その理念を十分達成できるふさわしいものと考えている。

- ・ 別途シラバス及び教育課程等の概要(別紙様式第2号)を添付すること。
- ・ 履修モデルを添付すること。

## ○ 全学生の研究テーマ

### 大学院1年次生

- A: 医薬品微粒子のドライコーティング プロセスに関する研究
- B: Modeling & Simulation (M&S)の薬物動態学的応用と実践
- C: 小胞体ストレス防御へのコエンザイム Q10の新しい生理作用
- D: がん分子標的薬の個別化医療に関する研究

### 大学院2年次生

- E: 医薬品の乾式造粒におけるナノ・サブミクロン粒子の応用と評価
- F: sodium-glucose transporter を介した脳梗塞の発現機序解明

### 大学院3年次生

- G: 切迫早産治療薬リトドリンの個別化医療に関する研究
- H: 幼少期ストレス暴露による慢性疼痛増悪機構の解明

- ・ 一学生あたり30字以内で記載すること。

## ○ 医療機関・薬局等関連施設と連携した教育・研究内容

本研究科の特色の一つは、神戸市立医療センター・中央市民病院、ならびに理化学研究所・分子イメージング科学研究センターの協力による教育と研究にある。これらの機関の協力により、開設時から変わることなく継続的に以下の二つの特色ある教育と研究を行っている。

- (1) 研究科は臨床薬学研究を積極的に進めている臨床現場と共同研究体制を組む。この共同研究体制の中で、学生が臨床現場における医療従事者を対象とした基本研修を受け、研究課題を臨床薬学的視点で理解することが可能となる(神戸市立医療センター・中央市民病院)。
- (2) 研究科は医薬品の体内動態や薬力学的評価に先端的研究を展開する研究機関と共同研究体制を組み、その中で当該機関の研究指導を受ける機会を得る(理化学研究所・分子イメージング科学研究センター)。

- ・ 他職種との連携も含む。
- ・ 研究科又は専攻全体の教育研究活動と関連づけて具体的に記載すること。

## ○ 学位審査体制・修了要件

### 「学位論文審査体制」

#### (1) 学位論文審査体制と審査手順

学生は4年次の12月に学位論文審査の申請を行う。薬学研究科長は研究科教務委員と協議のうえで、申請された論文の研究領域から主査1名、副査2名を研究科専任教員の中から候補者として選出する。ただし、審査の厳格性および透明性を保つために申請者の指導教員を主査の候補とすることはできない。また、副査の候補者の内1名は、食品薬品総合科学研究科専任教員または学外の専門家に委嘱することができる。薬学研究科長は、研究科委員会に主査、副査の候補者案を提出し、研究科構成員の過半数の賛成により主査と副査を決定する。

主査および副査は申請された学位論文の審査を行い、その内容について学生の口頭試問を行う。主査および副査はこれらの審査結果を研究科長に提出する。学生は2月に研究科構成員の出席する学位論文発表会に論文の口頭発表を行い、質疑を受ける。この学位論文発表会は、原則として学内・学外に公開とする。薬学研究科長は学位論文審査に関する研究科委員会を招集し、主査および副査から提出された論文審査結果ならびに研究科教員の意見を聴取し、研究科委員会の構成員の3分の2以上の出席のもとで、出席者の3分の2以上の承認に基づき、学位（薬学博士）授与者としての推薦を決定する。研究科長は、研究科委員会の決定にしたがい、神戸学院大学大学院委員会に申請者を学位授与者として推薦する。神戸学院大学大学院委員会は、研究科委員会の推薦に基づき審議し、学位の授与を決定する。

#### (2) 学位論文の審査基準

2005年（平成17年）9月の中央教育審議会答申に指摘されているように、課程制大学院の趣旨から、博士の学位を授与する基準は、学位論文に特筆すべき顕著な研究業績を求めるのではなく、研究科設置の趣旨に適合した人材として養成されたかどうかにあると考えている。そのため、学生が自立して研究活動を行う十分な研究能力と、その基礎となる学識を有しているか否かについて、指導教員および研究科専任教員が総合的に評価を行う。この評価は学位論文に関する研究に限定せず、「薬学演習」における学生の研究発表や学会などへの参加や発表、講義に対する学習姿勢、さらには学術雑誌などへの原著論文（査読付き）・総説または記事の執筆・掲載など、学生の能力を総合的に判断して行う。

### 「修了要件」

本研究科に4年以上在学し、所定の単位を取得し、かつ必要な研究指導を受けたうえで、博士論文の審査と口頭試問に合格することを修了要件とする。ただし、在学期間については、神戸学院大学大学院学則第14条に基づくものとする。

このような学位論文審査体制と修了要件について、まだ修了対象者はいないため、開設時からの変更はない。

○ 修了者の進路の基本的な考え方(※新規事項)

本研究科の理念とミッションにも記述されているように、本研究科では、国内外の臨床薬学分野において第一線で活躍できる高度の専門性と研究者としての高い能力を持った臨床薬剤師、医薬品開発研究者および教育者などの養成を目指している。そのため、(1) 医療人として優れた疾病治療に貢献することに強い意欲を持った者、(2) 薬学の高度の専門性と研究能力を身につけ、将来、高度専門職業人として活躍することを希望する者、(3) 他者と連携を保ち、共同し、問題解決に努力し、リーダーとなりうる者、を受け入れて教育していることから、修了後の進路も基本的には国内外で活躍できる病院・薬局薬剤師、製薬企業の医薬品開発研究者、医療系・基礎系大学での教育者、医療に関わる公務員専門職などを考えている。

- ・ 修了者の進路について大学がどのように考えているか、あるいは進路の開拓についての大学の基本的な考え方等を記載すること。

# 大学院履修要項

2 0 1 4 年 度

神 戸 学 院 大 学



## 2014年度授業科目・担当者一覧

薬学専攻 博士課程

研究科長  
山元 弘

授 業 科 目	単 位 数	担 当 者	備 考
医 薬 品 分 子 設 計 解 析 学	1	袁 德其 津田 裕子	
分 子 薬 理 学	1	李 英培 糟谷 史代 屋山 勝俊	
医 薬 品 ナ ノ テ ク ノ ロ ジ ー	1	市川 秀喜 藤井 文彦	
予 防 薬 学	1	岡本 正志	
処 方 解 析 学	1	※1	
個 別 化 治 療 設 計 学	1	※1	
医 薬 品 安 全 性 評 価 学	1	※1	
先 進 医 療 薬 学	1	※1	
臨 床 薬 学 研 修	2	白川 晶一 杉岡 信幸 徳山 尚吾 福島 昭二 橋田 亨 北田 徳昭	
薬 学 演 習 I	2	※2	
薬 学 演 習 II	2	※2	
薬 学 演 習 III	2	※2	
薬 学 研 究 I	4	各指導教員	
薬 学 研 究 II	4	各指導教員	
薬 学 研 究 III	4	各指導教員	

※1は、2014年度非開講

※2 市川 秀喜、袁 德其、岡本 正志、久米 典昭、白川 晶一、杉岡 信幸、  
津田 裕子、徳山 尚吾、福島 昭二、武田 真莉子、山元 弘、李 英培、  
糟谷 史代、岸本 修一、鷹野 正興、屋山 勝俊、橋本 保彦、森本 泰子、橋田 亨  
尾上 浩隆、北田 徳昭

2014/09/26(金)16:01

科目	医薬品分子設計解析学			単位数	1.0
担当教員	袁 徳其、津田 裕子			キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期	曜日時限	土曜4限		
主題と目標	分子認識および超分子化学の基礎を学び、生体における高次元分子認識挙動を理解させる。分子認識に関わる弱い分子間相互作用を応用して特定機能を示す機能性分子を設計できるようにする。				
評価基準	授業への取り込み状況および貢献度(60%)、プレゼンテーション・レポート(40%)				
提出課題など					
その他					
テキスト	プリント配布				
参考書					
指定図書					
ホームページ					

<授業計画>		
講義番号	主題	内容
第1回		分子認識原理および分子認識能の評価
第2回		分子設計原理
第3回		生体機能探索子の設計
第4回		人工レセプターの機能 その1
第5回		人工レセプターの機能 その2
第6回		人工酵素の機能 その1
第7回		人工酵素の機能 その2
第8回		演習
第9回		薬物認識と特異性
第10回		ドラッグデザインと薬物 その1
第11回		ドラッグデザインと薬物 その2
第12回		抗血栓作用を有するトロンビン阻害剤の設計
第13回		プラスミン阻害剤のデザインと臨床応用
第14回		ペプチド類似化合物の設計
第15回		演習

2014/09/26(金)16:02

科目	分子薬理学		単位数	1.0
担当教員	李 英培、糟谷 史代、屋山 勝俊		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 後期	曜日時限	水曜6限	
主題と目標	<p>(教育目標)                  医薬品の適正使用には、医薬品の作用機構および有害作用・相互作用に関する分子レベルでの理解が不可欠である。また、このような医薬品に対する深い理解は、チーム医療の中で薬剤師に求められる最も重要な職能でもある。本科目においては、代表的な中枢神経系あるいは循環器系に作用する薬の作用機構を分子レベルで理解することを目的とし、医薬品適正使用ができる能力の養成を目指す。さらに、医薬品を安全に使用するために必要な医薬品の有害作用機構およびその回避について理解する                  本科目では3名で分担し、下記のように個々の教育目標を掲げる。</p> <p>担当者：李 英培(1-4回)                  講義内容：中枢薬理                  教育目標：アルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患と統合失調症やうつ病などの精神疾患の成因を分子レベルで学び、これらの疾患治療薬の作用様式、副作用、薬物相互作用について説明できる。</p> <p>担当者：屋山 勝俊(5-7回)                  講義内容：循環器薬理                  教育目標：最新の英語論文を通して、循環器系疾患(高血圧)治療に用いる薬物の作用機構を説明できる。</p> <p>担当者：糟谷 史代(8-10回)                  講義内容：医薬品毒性                  教育目標：薬物による有害作用の主原因である代謝酵素やトランスポーターの種々の特性を学び、それに起因する毒性発現メカニズムを理解し、回避するための知識を習得する。また、薬毒物の諸性質に精通し、中毒症状の把握や解毒法などについて理解し、発生防止のための対策を考える。</p>			
評価基準	講義での質疑応答50%および講義での課題50%として評価する。			
提出課題など				
その他				
テキスト	プリントを配布する。			
参考書				
指定図書				
ホームページ				

<授業計画>		
講義番号	主題	内容
第1回	神経科学概論	第1-4回では中枢薬理学について担当者が単に講述するのではなく、受講者と共に議論しながら講義を進める。 中枢神経系は、神経細胞であるニューロン、グリア細胞であるアストロサイトやミクログリアなどの細胞から構成されている。中枢神経系に作用する薬物を理解するためには、構成する細胞群の機能的な役割を理解することが必須である。
第2回	中枢神経作用薬① 神経変性疾患治療薬	代表的な神経変性疾患であるパーキンソン病やアルツハイマー病の病態について議論した後、これらの神経変性疾患におけるニューロンやグリア細胞の病態的な役割を学ぶ。さらに、これらの疾患の治療薬のメカニズムの理解を深める。
第3回	中枢神経作用薬② 統合失調治療薬	精神疾患である統合失調症の治療薬に新たな展開がみられる。既存の治療薬とは異なる作用機構をもった新薬が開発されてきている。ここでは、精神疾患治療薬の新たな作用メカニズムを理解する。
	中枢神経作用薬③	うつ病の治療薬に新たな展開がみられる。既存の治療薬とは異なる作用機構をもった新薬が開

第4回	うつ病治療薬	発されてきている。ここでは、中枢神経系作用薬の新たな作用メカニズムを理解する。
第5回	循環器系作用薬① 循環器系疾患治療薬	生活様式の欧米化に伴って、循環器系疾患に罹患する患者数は増加している。我が国における高血圧患者は4000万人以上と推定されており、そのうち本態性高血圧症患者が90-95%を占める。本態性高血圧の発症には、遺伝的因子や環境因子が関与しているが未だその原因は明らかではない。高血圧の放置は、脳血管障害、心疾患、腎障害など致命的な合併症を派生する。そこで、高血圧の治療目的は、脳出血や心臓病を中心とした合併症の予防にある。2009年高血圧治療に対するガイドライン(JSH2009)が発表され、高血圧治療の目的を達成するには、降圧目標までしっかり血圧を下げるのが必須であるとされている。JSH2009の中には、その降圧目標を達成するための薬物の選択にも触れられている。 アンジオテンシンⅢは、強力な血管収縮性因子であり、その収縮にはカルモジュリン系が関与すると考えられてきた。しかし近年、アンジオテンシンⅢによる血管収縮には、Jak/Rho系が重要であることが報告され、新たな薬物のターゲットとして注目を浴びている。本講義では、最新の学術論文を基に、高血圧治療に用いられる薬物について、これまでに得られているエビデンス、作用機序について考えるとともに新たな創薬ターゲットについて議論を深めていきたい。
第6回	循環器系作用薬② 循環器系疾患治療薬	最近、冠動脈疾患合併症患者の降圧薬選択について、欧米及び日本における大規模臨床試験の結果が報告された。この結果を基に、冠動脈疾患合併症患者の降圧薬選択について考えていきたい。高血圧は、心不全発症に大きく関わっている。心不全発症予防に血圧のコントロールが如何に重要であるかを、大規模臨床試験の結果、基礎研究の結果、両面から考えていきたい。
第7回	循環器系作用薬③ 血管新生阻害薬	近年、血管の収縮にJak/Rho系が重要な役割を担っていることが報告された。これら報告を基に、Jak/Rho系は高血圧治療の創薬ターゲットとなるかについて考えていきたい。
第8回	医薬品の代謝活性化	医薬品などが代謝活性化されることにより、細胞障害、発ガン、アレルギー反応などを引き起こす基本的な毒性発現機構を理解し、医薬品の最新の副作用情報からその毒性を回避するための方法を学ぶ。
第9回	代謝酵素およびトランスポーターの遺伝的多型	医薬品の副作用発現には、代謝酵素やトランスポーターの遺伝子多型に起因することが多い。そのメカニズムを理解し、副作用の発見、回避方法を学ぶ。一方、副作用回避のための遺伝子診断について理解し、海外と日本を比較する。
第10回	化学物質(医薬品を含む)の中毒とその対処法	医薬品・毒物の諸性質、中毒機構、中毒症状の特徴、中毒原因物質の分析・同定法を学ぶことにより、より確実な解毒や治療方針を提案できる。その一連の流れを理解し、発生防止のための対策を考える。

2014/09/26(金)16:02

科目	医薬品ナノテクノロジー		単位数	1.0
担当教員	市川 秀喜、藤井 文彦		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 後期	曜日時限	土曜4限	
主題と目標	<p>【主題】 ナノスケールでの「もの作り」技術であるナノテクノロジーを理解し、医療分野へ応用するために、その特徴、有用性、問題点に関する基本的知識、応用面における最先端知識、および取扱いに関する基本的技能を修得する。</p> <p>【目標】 受講者の到達目標を以下に掲げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ナノテクノロジーの概念と有用性について説明できる。</li> <li>2. ナノテクノロジーの医療応用における主な利点と問題点を列挙できる。</li> <li>3. ナノマテリアルの特性について説明できる。</li> <li>4. ナノテクノロジーと製剤技術の関わりについて説明できる。</li> <li>5. ナノテクノロジーを用いた病巣診断や疾患治療の代表例を列挙できる。</li> <li>6. 代表的なナノ粒子の調製と物性計測の体験を通じて、それらの意義および品質との関連を概説できる。</li> </ol>			
評価基準	授業中の質疑状況30%、レポート70%として評価します。			
提出課題など	毎授業時に指示した課題についてレポートを提出してもらいます。			
その他	<p>【受講生に対する希望】</p> <p>本講は、物理化学、熱力学、製剤学、製剤工学、薬剤学、細胞生物学、有機合成化学等を基礎として、これらの学術専門分野にまたがる複合的な内容で構成されます。したがって、受講前にそれら個々の専門分野に習熟しておくことを望みます。</p>			
テキスト	主としてパワーポイントを用いて講義を進めますので、パワーポイント原稿を印刷して配布します。その他は授業開始時に指示します。			
参考書	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Edward L. Wolf・著『ナノ構造の科学とナノテクノロジー』共立出版</li> <li>・産業技術総合研究所ナノテクノロジー知識研究会・著『ナノテクノロジーハンドブック』日経BP社</li> <li>・小石真純・著『もっと知りたいナノ粒子の世界』日刊工業新聞社</li> <li>・ナノパーティクルテクノロジーハンドブック編集委員会・編『ナノパーティクルテクノロジーハンドブック』日刊工業新聞社</li> <li>・片岡一則・監『医療ナノテクノロジー —最先端医学とナノテクの融合』杏林図書</li> <li>・田端康彦・編『絵で見てわかるナノDDS』メディカルドゥ</li> </ul>			
指定図書				
ホームページ				

## &lt;授業計画&gt;

講義番号	主題	内容
第1回	ナノテクノロジーの概念と概要(市川秀喜)	ナノテクノロジーの基本的なコンセプトを理解するために、はじめにナノスケールの世界とはどのようなものか、そこに現れる特徴的な性質は何かについて学ぶ。
第2回	ナノマテリアルとは(市川秀喜)	ナノマテリアルは、一般に、「少なくとも一次元の大きさが100 nmより小さい」物質をさし、そのサイズゆえに、バルク材料とは異なる様々な特徴的な性質を有する。ここでは、金属、無機、有機物質のうち、ライフサイエンス分野で実用化されている代表的なナノマテリアルの例を挙げ、それらの基本的な特性を学ぶ。
第3回～第5回	医薬品分野におけるナノテクノロジーの利用(市川秀喜)	医薬品開発や薬物治療の現場では、つねに医薬品の適正使用、安定供給、有効性、安全性および安定性を担保するための薬物の加工、すなわち製剤化の知識と技能が求められる。ナノテクノロジーは、例えば、こうした製剤化のための機能性添加剤やナノメディスンと称される薬物送達システムの開発に利用されようとしている。そのような製剤化をはじめとして、医薬品分野におけるナノテクノロジーの代表的な応用例について学び、その特徴や課題について議論する。
第6回～第8回	ライフサイエンス分野におけるナノテク	ナノテクノロジーやナノマテリアルの用途は、医薬品分野のみならず、ライフサイエンス分野にも多面的な広がりを見せている。ここでは、その代表例として、量子ドットと呼ばれる半導体ナノ結晶を用いた光イメージング技術に焦点を当て、生体深部の可視化、生体分子や生きた細胞

	ノロジーの利用(藤井文彦)	のダイナミクスを観るための強力な手法に関する技術について、最新の知見を学ぶ。
第9回～第10回	ナノ粒子の製造と物性計測の実際(市川秀喜)	ナノメディシンや高い機能性製剤の開発には、ナノ粒子の製造や物性の計測の実際を知ることが重要である。ここでは、難水溶性の医薬品結晶を取り上げ、これをブレイクダウン法でナノ粒子化するための処方考え方を学び、実際にその製法を見学体験する。さらに、調製したナノ粒子の物性の一例として、動的光散乱法による粒子径測定操作を見学し、物性計測法の実際を学ぶ。

2014/09/26(金)16:03

科目	予防薬学		単位数	1.0
担当教員	岡本 正志		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期	曜日時限	水曜6限	
主題と目標	<p>(主題)急速な高齢化社会やライフスタイルの欧米化を背景に、わが国では生活習慣病をはじめとする慢性疾患が医療上の大きな問題となっている。このような状況下、薬剤師は薬物による疾病治療に参画するだけでなく、NSTや糖尿病患者などにおける栄養学的支援が急務となってきている。また、予防薬学の観点から、栄養素摂取の不均衡や生活習慣の改善、サプリメント(いわゆる健康食品)や民間療法などの代替療法についても科学的視点から十分に理解することが必要である。本講義では、薬剤師にとって必要な最新の予防薬学に関する知識や臨床栄養学的な知識を学び、予防薬学のさらなる展開と重要性について議論する。なお、授業形態はゼミ形式で行う。</p> <p>(目標)以下のような到達目標を掲げる。①高齢化社会に多発する生活習慣病の慢性疾患などを軽減するために、薬剤師にとって必要な最新の予防薬学の知識・技能・態度を身につける。②科学的根拠に基づいた医療を行うために、薬剤師として代替療法の問題点を抽出し、整理し、その対応策を講じることができる。</p>			
評価基準	発表資料、発表内容、討論(質疑応答)への参加状況を総合的に評価する。			
提出課題など	発表前に資料を提出してもらう。			
その他				
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				

<授業計画>		
講義番号	主題	内容
第1回	導入講義	薬剤師としての予防薬学の重要性
第2回	予防薬学(1)	生活習慣病予防のための薬剤師の役割(1)
第3回	予防薬学(2)	生活習慣病予防のための薬剤師の役割(2)
第4回	予防薬学(3)	生活習慣病予防のための薬剤師の役割(3)
第5回	予防薬学(4)	サプリメントと薬の併用摂取(投薬)の問題点(1)
第6回	予防薬学(5)	サプリメントと薬の併用摂取(投薬)の問題点(2)
第7回	予防薬学(6)	薬剤師としての代替療法への関与(1)
第8回	予防薬学(7)	薬剤師としての代替療法への関与(2)
第9回	予防薬学(8)	薬剤師としての代替療法への関与(3)
第10回	まとめ	予防薬学に従事する薬剤師の問題点

2014/09/26(金)16:03

科目	臨床薬学研修		単位数	2.0
担当教員	白川 晶一、北田 徳昭、杉岡 信幸、徳山 尚吾、橋田 亨、福島 昭二		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期	曜日時限	集中講義	
主題と目標	<p>主題) 日本は世界に先んじて高齢化社会を迎え、医療の拠点は、病院から在宅へシフトしつつあります。また、疾病構造の変化から、急性期病院から慢性期病院と、医療施設の役割分担も求められるようになってきました。医療の担い手として薬剤師は、病院での病棟業務や在宅医療への介入が、これまで以上に求められています。これら社会のニーズに応じて、患者のQOL向上を目指すには、しっかりした臨床力が必要になってきます。ここでは、そのような臨床力を学びます。</p> <p>目標) 臨床薬剤師として、必要な知識と技能や態度を学ぶことを目標とします。</p>			
評価基準	<p>講義に取り組む姿勢、態度、課題の提出率、課題の回答内容、口頭試問を総合的に判断します。</p> <p>1) 講義に取り組む姿勢や態度 .....20%</p> <p>2) 課題の提出率.....20%</p> <p>3) 課題の回答内容.....30%</p> <p>4) 口頭試問.....30%</p>			
提出課題など	適宜、指示する			
その他	現場での研修となるので、症候と検査値を十分理解しておくこと。			
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				

## &lt;授業計画&gt;

講義番号	主題	内容
第1回	バイタルサイン	薬剤師に必要なバイタルサインのとり方、モニターの見方
第2回	ICU	クリティカルケア現場における薬剤師の役割
第3回	CCU	虚血性心疾患や大動脈疾患などの、心・血管疾患における薬剤師の役割
第4回	SCU	脳卒中における薬剤師の役割
第5回	臓器移植	臓器移植における薬剤師の役割 ～特に免疫抑制薬を中心に～
第6回	腎機能障害	腎機能障害患者における薬剤師の役割
第7回	肝機能障害	肝機能障害患者における薬剤師の役割
第8回	疼痛緩和	緩和医療における薬剤師の役割
第9回	NST	NSTにおける薬剤師の役割
第10回	ICT	ICTにおける薬剤師の役割



2014/09/26(金)16:04

科目	薬学演習 I		単位数	2.0
担当教員	徳山 尚吾、市川 秀喜、岡本 正志、尾上 浩隆、糟谷 史代、岸本 修一、北田 徳昭、久米 典昭、白川 晶一、杉岡 信幸、鷹野 正興、津田 裕子、橋本 保彦、橋田 亨、福島 昭二、森本 泰子、武田 真莉子、屋山 勝俊、山元 弘、李 英培、袁 徳其		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(土曜5限 土曜6限)、後期(土曜5限 土曜6限)	
主題と目標	<p>主体的に研究の方向性を定め、研究課題を決定するために、まず指導教員のもとで研究領域の学術論文を調査する。調査を通じて、論文の読解力を身につけ、論文の概要をまとめて、総説的に提示する能力を養う。これらを集約して、研究の構想について発表する能力を身につける。</p> <p>本科目では、教育目標を達成するために、個別演習および合同演習の2つの形式で授業を実施する。個別演習(前期9回、後期9回)：指導教員の授業計画に基づき、指導教員の研究室において、研究課題に関連する研究領域の外国語学術論文の読解や発表の方法と技術を学ぶ。これらを通じて、論文読解を積み重ね、研究課題に関する背景調査結果としてまとめる。合同演習(前期1回、後期1回)：薬学研究科所属の全教員に対し、①研究課題に関する背景調査結果の総括および②学生自身の研究構想・計画を口頭発表形式で提示し、質疑応答を行う。</p>			
評価基準	<p>個別演習：60%(学術論文の調査・読解20%、発表態度20%、質疑応答20%)合同演習：40%(背景調査の総説発表20%、研究構想・計画の発表10%、質疑応答10%)なお、個別演習の成績評価は指導教員が行う。合同演習の成績については、薬学研究科の全専任教員が上記の基準に基づいて個々に評価し、その平均点とする。</p>			
提出課題など				
その他	本科目では、パワーポイントを用いた口頭発表を主体とした授業を行う。従って、予めパワーポイントによる資料作成や資料提示操作に習熟しておくことが望ましい。			
テキスト	授業開始前に、指導教員が指示する。			
参考書	授業開始前に、指導教員が指示する。			
指定図書	授業開始前に、指導教員が指示する。			
ホームページ				
<授業計画>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:04

科目	薬学演習Ⅱ		単位数	2.0
担当教員	徳山 尚吾、市川 秀喜、岡本 正志、尾上 浩隆、糟谷 史代、岸本 修一、北田 徳昭、久米 典昭、白川 晶一、杉岡 信幸、鷹野 正興、津田 裕子、橋本 保彦、橋田 亨、福島 昭二、森本 泰子、武田 真莉子、屋山 勝俊、山元 弘、李 英培、袁 徳其		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(土曜5限 土曜6限)、後期(土曜5限 土曜6限)	
主題と目標	<p>立案した研究方法や研究手技にもとづく実験から得られた結果の妥当性を評価し、指導教員と討論する態度を身につける。また、学会等において研究会成果を報告し、討論することを体験する。学会報告のための要旨の作成、ポスターあるいは口頭発表用の資料の作成、口頭発表のスキルを修得するとともに、研究課題に関する情報を適切に収集し、幅広い領域の知識を身につける。指導教員を含む複数の教員や学生の前で、研究の進捗状況をまとめ、発表し、現状の確認と今後の展望を考察する。</p> <p>本科目では、教育目標を達成するために、個別演習および合同演習の2つの形式で授業を実施する。</p> <p>個別演習(前期10回、後期9回)：指導教員の授業計画に基づき、指導教員の研究室において、研究課題に関連する研究領域の外国語学術論文の読解や発表の方法と技術を学ぶ。これらを通じて、論文読解を積み重ね、研究課題に関する背景調査結果としてまとめる。</p> <p>合同演習(後期1回)：薬学研究科所属の全教員に対し、①研究課題に関する背景調査結果の総括および②学生自身の研究構想・計画・進捗状況を口頭発表形式で提示し、質疑応答を行う。</p>			
評価基準	<p>個別演習：60%(学術論文の調査・読解20%、発表態度20%、質疑応答20%)</p> <p>合同演習：40%(背景調査の総説発表10%、研究構想・計画・進捗状況の発表20%、質疑応答10%)</p> <p>なお、個別演習の成績評価は指導教員が行う。合同演習の成績については、薬学研究科の全専任教員が上記の基準に基づいて個々に評価し、その平均点とする。</p>			
提出課題など				
その他	本科目では、パワーポイントを用いた口頭発表を主体とした授業を行う。従って、予めパワーポイントによる資料作成や資料提示操作に習熟しておくことが望ましい。			
テキスト	授業開始前に、指導教員が指示する。			
参考書	授業開始前に、指導教員が指示する。			
指定図書	授業開始前に、指導教員が指示する。			
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:04

科目	薬学演習Ⅲ		単位数	2.0
担当教員	徳山 尚吾、市川 秀喜、岡本 正志、尾上 浩隆、糟谷 史代、岸本 修一、北田 徳昭、久米 典昭、白川 晶一、杉岡 信幸、鷹野 正興、津田 裕子、橋本 保彦、橋田 亨、福島 昭二、森本 泰子、武田 真莉子、屋山 勝俊、山元 弘、李 英培、袁 徳其		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(土曜5限 土曜6限)、後期(土曜5限 土曜6限)	
主題と目標	<p>指導教員、教員、外部研究者との議論により、必要な研究方法や研究手技を再検討し、得られた結果の妥当性を再評価する。また、学会や研究会において成果を報告し、外部研究者の発表をきいて積極的に討論に参加する態度を養う。日本語のみならず、英語による要旨作成、プレゼンテーションのスキルを修得する。指導教員を含む複数の教員や学生の前で、研究の進捗状況をまとめ、発表し、これまでの研究活動の総括を行う。</p> <p>本科目では、教育目標を達成するために、個別演習および合同演習の2つの形式で授業を実施する。</p> <p>個別演習(前期10回、後期9回)：指導教員の授業計画に基づき、指導教員の研究室において、研究課題に関連する研究領域の外国語学術論文の読解や発表の方法と技術を学ぶ。これらを通じて、論文読解を積み重ね、研究課題に関する背景調査結果としてまとめる。</p> <p>合同演習(後期1回)：薬学研究科所属の全教員に対し、①研究課題に関する背景調査結果の総括および②学生自身の研究構想・計画・進捗状況を口頭発表形式で提示し、質疑応答を行う。</p>			
評価基準	<p>個別演習：60%(学術論文の調査・読解20%、発表態度20%、質疑応答20%)</p> <p>合同演習：40%(背景調査の総説発表10%、研究構想・計画・進捗状況の発表20%、質疑応答10%)</p> <p>なお、個別演習の成績評価は指導教員が行う。合同演習の成績については、薬学研究科の全専任教員が上記の基準に基づいて個々に評価し、その平均点とする。</p>			
提出課題など				
その他				
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:05

科目	薬学研究 I		単位数	4.0
担当教員	市川 秀喜		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>教育目標 将来的に研究活動を自ら実践できるようになるための第1ステップとして、主体的に研究の方向性を定め、研究課題の設定を行う。</p> <p>授業内容 製剤学, 製剤工学, ナノテクノロジー, 薬剤学分野の総説や学術論文を精読し, 研究動向を調査・把握することによって, 現状と問題点を的確に整理する。これを通じて, 研究課題の方向性を定め, 当該研究領域における位置づけと学術的意義について議論を重ねながら, 研究構想を練る。</p>			
評価基準	論文等の精読状況, 日々の研究活動への取組み姿勢, 研究室内の定例報告会等における発表・質問態度などで総合的に判断する。			
提出課題など	適宜指示する。			
その他	活動全般にわたり, 主体的かつ積極的に取組むことを望みます。			
テキスト	適宜指示する。			
参考書	適宜指示する。			
指定図書				
ホームページ				
<授業計画>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:05

科目	薬学研究 I		単位数	4.0
担当教員	岡本 正志		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>(主題)薬学研究 I では、指導教員のもと、薬学領域の高度な知識・技能・研究能力を深め、優れた態度と国際的視野に立った高度の薬学研究の実践能力を身につけることを主題とする。</p> <p>(目標)以下のような到達目標を掲げる。①研究課題に関係する文献調査を行うことができる。②研究課題に関する具体的な研究計画を立案し、実施することができる。③研究課題に対する研究結果を整理し、発表し、考察することができる。④研究課題の問題点を抽出し、問題点の解決のための研究計画案を示すことができる。</p>			
評価基準	研究課題への取り組み、研究態度、レポートの内容、討論(ゼミ)への参加状況などを総合的に評価する。			
提出課題など	定期的な研究レポート、薬学演習(発表会)のレジメを提出課題とする。			
その他	薬学研究 I は指導教員(岡本)との演習形式で順次進めていく。			
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				

## &lt;授業計画&gt;

講義番号	主題	内容
第1回	導入演習	研究課題と文献調査(1)
第2回	演習(1)	研究課題と文献調査(2)
第3回	演習(2)	研究課題と文献調査(3)
第4回	演習(3)	研究課題と文献調査(4)
第5回	演習(4)	研究課題と文献調査(5)
第6回	演習(5)	研究課題の計画案(1)
第7回	演習(6)	研究課題の計画案(2)
第8回	演習(7)	研究課題の計画案(3)
第9回	演習(8)	研究課題の遂行(1)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第10回	演習(9)	研究課題の遂行(2)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第11回	演習(10)	研究課題の遂行(3)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第12回	演習(11)	研究課題の遂行(4)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第13回	演習(12)	研究課題の遂行(5)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第14回	演習(13)	研究課題の遂行(6)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第15回	演習(14)	研究課題の遂行(7)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第16回	演習(15)	研究課題の遂行(8)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第17回	演習(16)	研究課題の遂行(9)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第18回	演習(17)	研究課題の遂行(10)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第19回	演習(18)	研究課題の遂行(11)(研究結果の整理、考察、問題点への対応計画)
第20回	演習(19)	まとめと次年度への研究計画

2014/09/26(金)16:06

科目	薬学研究 I		単位数	4.0
担当教員	杉岡 信幸		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>将来的に独立した研究活動を行えるようになるために、これらの活動に対する基本的な知識・技能・態度を習得する。</p> <p>研究開始に際して、動物実験および遺伝子関連実験における倫理観等の定着をはかり、研究計画のたてかた、関連論文の検索、情報収集、実験手技の基本技術の習得を行なう。</p> <p>この段階では研究室で行なわれている様々な研究活動をローテーションして、研究テーマを見出す事を主体とする。</p>			
評価基準	日々の研究活動や定期的開催される研究室における報告会などにおける発表や質問態度等を総合的に判断する。			
提出課題など				
その他	特別な希望はありませんが、とにかく地道に研究を続ける事が肝要です。			
テキスト	適宜指示します。			
参考書	適宜指示します。			
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:06

科目	薬学研究 I		単位数	4.0
担当教員	福島 昭二		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	臨床薬剤学・臨床薬理学・薬物治療学などの分野で研究テーマを設定し、それらに関連する原著論文・総説などの読破・発表を通し、最近の研究動向を把握する。さらに、具体的な研究課題を設定し、今後の構想を構築する。また学部学生の指導を通し、教育者・指導者としての素養も身につけていく。			
評価基準	研究への取り組み、ゼミ発表、学会発表、論文作成、学生指導などにより、総合的に評価する。			
提出課題など				
その他				
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:06

科目	薬学研究Ⅱ		単位数	4.0
担当教員	徳山 尚吾		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>将来的に独立した研究活動を行えるようになるために、これらの活動に対する基本的な知識・技能・態度を習得する研究を開始して1年が経過した段階では、薬学研究Ⅰで培ったノウハウを駆使して、自分で得た研究成果を学会、論文等に報告する能力を養うことを目標にする。</p> <p>さらに、継続して動物実験および遺伝子関連実験における倫理規等の定着をはかり、研究計画のたてかた、関連論文の検索、情報収集、実験手技の基本技術の習得を行なう。</p>			
評価基準	日々の研究活動や定期的に行われる研究室における報告会などにおける発表や質問態度等を総合的に判断する。			
提出課題など				
その他	特別な希望はありませんが、とにかく地道に研究を続ける事が肝要です。			
テキスト	適宜指示します。			
参考書	適宜指示します。			
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		



2014/09/26(金)16:06

科目	薬学研究Ⅱ		単位数	4.0
担当教員	市川 秀喜		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>教育目標 将来的に研究活動を自ら実践できるようになるための第2ステップとして、薬学研究Ⅰを通じて定めた研究課題と構想に基づき、これを遂行するために必要な方法論の情報収集、研究手技の調査・準備を行い、実験計画を立案し、遂行する。</p> <p>授業内容 決定した研究テーマに関する基礎的技術の知識の集積と手技の習得を経て、実験に着手する。得られた実験結果の十分な吟味・検証作業を繰り返し行い、これを通して、解析・考察の能力を養う。</p>			
評価基準	論文等の精読状況、日々の研究活動への取組み姿勢、研究室内の定例報告会等における発表・質問態度などで総合的に判断する。			
提出課題など	適宜指示する。			
その他	活動全般にわたり、主体的かつ積極的に取組むことを望みます。			
テキスト	適宜指示する。			
参考書	適宜指示する。			
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:07

科目	薬学研究Ⅲ		単位数	4.0
担当教員	徳山 尚吾		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	<p>将来的に独立した研究活動を行えるようになるために、これらの活動に対する基本的な知識・技能・態度を習得する。</p> <p>研究開始 3 年目になるので、薬学研究 I、II で培ったノウハウを駆使して、自分で得た研究成果を学会、論文等に報告する能力を確立することを目的とする。</p> <p>さらに、継続して動物実験および遺伝子関連実験における倫理観等の定着をはかり、研究計画のたてかた、関連論文の検索、情報収集、実験手技の基本技術の習得を行なう。</p>			
評価基準	日々の研究活動や定期的に行われる研究室における報告会などにおける発表や質問態度等を総合的に判断する。			
提出課題など				
その他	特別な希望はありませんが、とにかく地道に研究を続ける事が肝要です。			
テキスト	適宜指示します。			
参考書	適宜指示します。			
指定図書				
ホームページ				
<b>&lt;授業計画&gt;</b>				
講義番号	主題	内容		

2014/09/26(金)16:07

科目	薬学研究Ⅲ		単位数	4.0
担当教員	福島 昭二		キャンパス	ポートアイランド
開講学期	2014年度 前期～後期	曜日時限	前期(集中講義)、後期(集中講義)	
主題と目標	指導教員との討議のもと、さらに研究を進める。また、次年度で評価すべき結果が得られるように、当初の構想を適時見直し、円滑な研究活動を行うと共に、積極的にゼミ・学会発表を行い、原著論文を作成・発表する。また、引き続き学部学生の指導を行い、より高い意識を持った教育者・指導者となる。			
評価基準	研究への取り組み、ゼミ発表、学会発表、論文作成、学生指導などにより、総合的に評価する。			
提出課題など				
その他				
テキスト				
参考書				
指定図書				
ホームページ				

## &lt;授業計画&gt;

講義番号	主題	内容
------	----	----

薬学研究科 薬学専攻 博士課程カリキュラム

科目区分	科目名	単位数
専門科目	医薬品分子設計解析学	1
	分子薬理学	1
	医薬品ナノテクノロジー	1
	予防薬学	1
	処方解析学	1
	個別化治療設計学	1
	医薬品安全性評価学	1
	先進医療薬学	1
	臨床薬学研修	2
	薬学演習Ⅰ	2
	薬学演習Ⅱ	2
	薬学演習Ⅲ	2
	薬学演習Ⅳ	2
	薬学研究Ⅰ	4
	薬学研究Ⅱ	4
	薬学研究Ⅲ	4
薬学研究Ⅳ	4	

別記様式第2号 (その2の1)

教育課程等の概要															
(大学院薬学研究科 薬学専攻 博士課程 (D))															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	医薬品分子設計解析学	1前		1		○			2						オムニバス
	分子薬理学	1前		1		○			1	2					オムニバス
	医薬品ナノテクノロジー	1後		1		○			1						
	予防薬学	1後		1		○			1						
	処方解析学	2前		1		○			2						兼1 オムニバス
	個別化治療設計学	2前		1		○			2	1					オムニバス
	医薬品安全性評価学	2後		1		○			2		1				オムニバス
	先進医療薬学	2後		1		○			2		1				オムニバス
	臨床薬学研修	1前			2			○	4						兼1 オムニバス
	薬学演習Ⅰ	1通	2					○	13	3	2				
	薬学演習Ⅱ	2通	2					○	13	3	2				
	薬学演習Ⅲ	3通	2					○	13	3	2				
	薬学演習Ⅳ	4通	2					○	13	3	2				
	薬学研究Ⅰ	1通	4					○	13						
	薬学研究Ⅱ	2通	4					○	13						
	薬学研究Ⅲ	3通	4					○	13						
	薬学研究Ⅳ	4通	4					○	13						
合計 (17 科目)		—	24	8	2	—			13	3	2	0	0	兼1	—
学位又は称号	博士 (薬学)		学位又は学科の分野			薬学関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
本研究科に4年以上在学し、必修科目24単位、選択科目から6単位以上、合計30単位以上を修得すること。必要な研究指導を受けたうえで博士論文の審査と口頭試問に合格しなければならない。							1 学年の学期区分				2 学期				
							1 学期の授業期間				15週				
							1 時限の授業時間				90分				

## 進路別履修モデル

## 【履修例1】臨床実務の場で活躍する高度な専門職業人を目指す場合

1. 対象：医薬品の安全性・有効性における遺伝子多型性の関与に関心をもつ学生
2. 博士論文テーマ：クロピドグレルの抗凝固作用における CYP 遺伝子多型解析

## 3. 履修科目

学 年	授 業 科 目	単 位
1	分子薬理学	1
	予防薬学	1
	臨床薬学研修	2
	薬学演習 I	2
	薬学研究 I	4
2	個別化治療設計学	1
	処方解析学	1
	医薬品安全性評価学	1
	先進医療薬学	1
	薬学演習 II	2
	薬学研究 II	4
3	薬学演習 III	2
	薬学研究 III	4
4	薬学演習 IV	2
	薬学研究 IV	4
合 計		32

4. 遺伝子解析技術の急速な開発により、薬物の有効性や有害性に影響を与える薬理遺伝学的マーカーが数多く見いだされてきた。それらのうち、最も大きな領域は薬物の代謝による活性化あるいは不活性化に影響する遺伝子であり、チトクローム P450 の遺伝子多型性は臨床的な薬物の有効性・安全性評価において極めて重要である。抗血小板薬として臨床的に汎用されるクロピドグレルは、CYP2C19 により活性代謝物に変換され、ADP の血小板における受容体である P2Y12 受容体を不可逆的に阻害することにより、血小板凝集を強く抑制するが、この CYP2C19 の遺伝子多型性により、クロピドグレルの薬効が弱められる場合と、強く発現する場合の両極端な臨床知見が報告されている。しかし実験的には CYP2C19 以外の CYP1A2 あるいは CYP2B6 もクロピドグレル代謝に関与するとの報告がある。そこで本研究では、薬物代謝動態学を専門とする指導教員と、遺伝子多型を研究する准教授を副指導教員として、クロピドグレル治療を受けている患者の CYP1A2、CYP2B6 の遺伝子多型性と血小板凝集能の関係について CYP2C19 多型との関連も含め明らかにする。研究の遂行は、医療

機関の循環器内科専門医との共同研究の中で進める。

講義科目として、薬物動態学、薬剤疫学、遺伝子多型性、さらにPET等の最新の研究技術の知識を学ぶため、予防薬学、分子薬理学、処方解析学、医薬品安全性評価学、個別化治療設計学、先進医療薬学を選択する。また、1年生前期には、病院で行われている薬物治療の実際について体験し、臨床薬学的視点について学ぶため、臨床薬学研修（自由科目）を選択する。

薬学演習Ⅰ～Ⅲでは、外国語論文の読解、研究の口頭やポスター発表方法と技術、学術論文執筆方法を学び、学内での研究発表、そして学外での学会発表を実践する。薬学演習Ⅳでは、博士論文の口頭発表や口頭試問への準備の指導を受ける。これら指導は、指導教員を中心に、研究科専任教員全体の共同体制で行う。

薬学研究Ⅰ～Ⅲでは、指導・副指導教員と研究計画の立案・実行・評価についてディスカッションを日常的に行い、科学的思考と実証に基づいた研究方法を学ぶとともに、研究会・学会への発表、そして学術論文への論文執筆と投稿を実践する。薬学研究Ⅳでは、指導教員のもとで、博士論文の作成に必要なデータの取りまとめ、執筆について指導を受ける。最終的な論文作成に当たっては、指導教授と共同研究を進める臨床医・薬剤師と密接な情報交換を行い、遺伝子多型解析と薬効との関連性について詳細なデータ解析と論文作成を行う。

このような学習を実践することにより、学生は臨床薬学的研究領域での独立した研究者として自立し、将来、臨床薬剤師として活動しながら、医師・看護師・臨床検査技師等の医療チームにおいて研究者としての役割を果たしうるものと期待される。

【履修例2】製薬関連企業の研究・開発に従事する研究者を目指す場合

1. 対象：薬物作用における細胞分子生物学の重要性に関心をもつ学生
2. 博士論文テーマ：血管内皮型一酸化窒素合成酵素のユビキチン・プロテアソーム系による制御に関する研究
3. 履修科目

学 年	授 業 科 目	単 位
1	医薬品分子設計学	1
	分子薬理学	1
	予防薬学	1
	薬学演習Ⅰ	2
	薬学研究Ⅰ	4
2	個別化治療設計学	1
	医薬品安全性評価学	1
	先進医療薬学	1
	薬学演習Ⅱ	2
	薬学研究Ⅱ	4
3	薬学演習Ⅲ	2
	薬学研究Ⅲ	4
4	薬学演習Ⅳ	2
	薬学研究Ⅳ	4
合 計		30

4. 心臓疾患・脳血管障害は癌と並ぶ日本人の主要な死因であるが、特に血管の機能障害に基づく慢性疾患は、薬物治療において重要な領域である。血栓症や血管攣縮のような血管機能の破綻は、血管内皮機能の障害に主因があるとされ、特に内皮機能の多くを担う一酸化窒素を合成する酵素の制御が病態解明に重要である。この酵素系の活性調節は膨大な研究により明らかとなったが、そのターンオーバーによる制御については未知の部分が多い。そこで循環器系を専門とする教授を指導教員に、血管薬理学を専門とする准教授を副指導教員として内皮型一酸化窒素合成酵素のユビキチン・プロテアソーム系による制御に関する基礎研究を行う。

講義科目として、医薬品分子設計学、予防薬学、分子薬理学により、酵素の化学的標識技術、メタボリックシンドロームと血管病の関連、薬物作用の分子メカニズムを学び、また、医薬品安全性評価学、個別化治療設計学、先進医療薬学から基礎研究の臨床応用への展開について学ぶ。

薬学演習Ⅰ～Ⅲでは、外国語論文の読解、研究の口頭やポスター発表方法と技術、学術論文執筆方法を学び、学内での研究発表、そして学外での学会発表を実践する。薬学演習Ⅳで



は、博士論文の口頭発表や口頭試問への準備の指導を受ける。これら指導は、指導教授を中心に、研究科専任教員全体の共同体制で行う。

薬学研究Ⅰ～Ⅲでは、指導・副指導教員と研究計画の立案・実行・評価についてディスカッションを日常的に行い、科学的思考と実証に基づいた研究方法を学ぶとともに、研究会・学会への発表、そして学術論文への論文執筆と投稿を実践する。薬学研究Ⅳでは、指導教員のもとで、博士論文の作成に必要なデータの取りまとめ、執筆について指導を受ける。

このような研究活動に参加することにより、学生は薬物作用の基盤となる基礎研究を体験し、その研究方法・技術、そしてデータ解析方法を学び、基礎研究から臨床研究へと展開する薬学領域での独立した研究者として自立し、将来、企業の医薬品開発研究のみならず、広く医療機関・大学で活躍する独立した研究者として役割を果たしうるものと期待される。

## 時間割

## 【前期】

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
4時限 (15:00~16:30)						医薬品分子設計解析学 (PP320 教室) 処方解析学 (CP275 教室)
5時限 (16:45~18:15)			分子薬理学 (PP320 教室) 個別化治療設計学 (CP275 教室)			薬学演習 (LSC カンファレンスルー ム)
6時限 (18:30~20:00)			分子薬理学 (PP320 教室) 個別化治療設計学 (CP275 教室)			

## 【後期】

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
4時限 (15:00~16:30)						医薬品ナノテクノロジー (PP320 教室) 先進医療薬学 (CP275 教室)
5時限 (16:45~18:15)			予防薬学 (PP320 教室) 医薬品安全性評価学 (CP275 教室)			薬学演習 (LSC カンファレンスルー ム)
6時限 (18:30~20:00)			予防薬学 (PP320 教室) 医薬品安全性評価学 (CP275 教室)			

## 入学から修了までの指導体制

### 【履修指導】

大学院に進学を希望する者は、大学ホームページや大学案内等から研究科教授の研究分野を確認し、希望する指導教員を選ぶ。受験前に当該教員に連絡し、その研究内容の説明を受けた上で指導教授を決定する。

履修指導は、指導教員ならびに研究科の教務担当委員が行う。

- a) 講義科目の履修は、できるだけ2年次までに修了に必要な単位数を修得し、3年次以降は薬学研究に専念できるよう指導する。
- b) 薬学演習ならびに薬学研究は、原則として1～4年次の学年毎に配当された単位を修得する。
- c) 臨床薬学研修は1年生前期のみの履修であり、指導教員の了承の上で、研究科委員会の許可に基づいて履修が可能となる。

### 【評価】

研究科委員会は、各講義科目及び臨床薬学研修に担当責任教員1名を置き、当該担当責任教員が学生の理解度や学修進行状況を担当者全員からとりまとめ、一定の評価基準に従って評価を行う。指導教員は、薬学演習Ⅰ～Ⅳの評価を行い、また薬学研究Ⅰ～Ⅳの評価を副指導教員の意見を考慮した上で行う。研究科の教務担当委員はこれら授業の評価を各学期毎に全てとりまとめ、研究科委員会で承認を受けた上で成績を教務事務室に提出する。成績は教務事務室より学生に通知される。

### 【研究指導】

薬学研究における指導教員は、学生の入学が確定した後に研究科委員会において決定する。副指導教員1名は、薬学研究科専任教員、食品薬品総合科学研究科専任教員の中から、指導教員の推薦と当該候補者の了承のもとで研究科委員会が決定する。

薬学研究における研究課題は、入学時に指導教員の指導のもとに決定する。指導教員は、研究課題に沿った研究に必要な指導を行い、博士論文作成の指導を行う。副指導教員は、指導教員の要請に基づいて学生に必要な指導助言等を行う。学生は、1年次に研究課題に関する文献調査を行い、指導教員の指導のもとに全体的な研究計画を立案し（薬学研究Ⅰ）、その内容について研究科が定期的に開催する研究発表会で発表する（薬学演習Ⅰ）。研究計画に従い、学生は研究に必要な方法・手技を調査し、予備的試験を経た後に実験を行う。得られた実験結果を正しく解析する手技を学び、それに基づいて考察を行う。このサイクルを繰り返すことにより、学生は指導教員の指導の下に、主体的に研究を展開する（薬学研究Ⅰ～Ⅳ）。これらの研究計画立案と、研究の進捗、あるいは関連する研究論文の紹介を、1年次後期から半期ごとに研究発表会で報告し、指導教員以外の研究科教員からも適切な研究アドバイスを受ける機会を持つ（薬学演習Ⅰ～Ⅳ）。指導教員は、学生の研究進捗状況を把握した上で、

学会・研究会等での発表を奨励し、発表に必要な準備について指導を行う（薬学演習Ⅰ～Ⅳ）。指導教員が学術雑誌への発表が可能なレベルであると判断した場合は、学生による研究論文執筆と投稿を指導する（薬学演習Ⅰ～Ⅳ）。指導教員は、学生の研究進捗状況にあわせて、博士論文の作成の指導を行い、4年次後期の学位論文提出、口頭発表、ならびに口頭試験に向けた準備を指導する（薬学演習Ⅳ、薬学研究Ⅳ）。

### 入学から修了までのスケジュール表

	学生の修学課題	教員の指導体制
入学前	<ul style="list-style-type: none"> <li>希望する指導教員との面談</li> <li>指導教員の決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育・研究内容の説明</li> <li>研究科委員会による指導教員決定</li> </ul>
入学時	<ul style="list-style-type: none"> <li>履修登録</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教員による履修指導</li> <li>研究課題の決定</li> <li>副指導教員の決定</li> </ul>
1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義科目の履修</li> <li>研究課題に関する背景調査と基本知識の学習</li> <li>研究に必要な方法論の調査・実施</li> <li>薬学演習での研究計画報告（学内）</li> <li>研究会・学会等への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究計画立案への指導</li> <li>研究課題の背景調査に必要な方法指導</li> <li>研究方法の基本指導</li> <li>学内での発表会準備の指導</li> <li>研究会・学会等への参加指導</li> <li>学術論文の読解指導</li> </ul>
2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の実践</li> <li>薬学演習での研究報告</li> <li>研究会・学会等への参加・発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の指導</li> <li>学内での発表会準備の指導</li> <li>研究会・学会等への発表指導</li> <li>学術論文の読解・執筆指導</li> </ul>
3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の実践</li> <li>薬学演習での研究報告</li> <li>研究会・学会等への参加・発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の指導</li> <li>学内での発表会準備の指導</li> <li>研究会・学会等への発表指導</li> <li>学術論文の執筆・投稿指導</li> </ul>
4年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の実践</li> <li>薬学演習での研究報告</li> <li>研究会・学会等への参加・発表</li> <li>博士論文執筆</li> <li>博士論文の口頭発表</li> <li>論文題目及び学位論文審査の申請手続</li> <li>論文審査にかかる口頭試問</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究の指導</li> <li>博士論文執筆の指導</li> <li>博士論文の口頭発表の指導</li> <li>研究会・学会等への発表指導</li> <li>学術論文の執筆・投稿の指導</li> </ul>